

水には易溶である。PCP-Na の家兎に対する致死量は静脈注射時は 22~23mg/per kg 皮下注射は 100mg/per kg、皮膚に塗布する時は 260 mg/per kg、経口的には 250~300 mg/per kg と大田氏の著書に Chem. Age より引用してあるが、本例に於ては約 60mg/per kg であつた。

PCP 中毒による自覚症として、野村氏の報告によれば、死亡例（就業後25日目）の自覚症の特異性は発汗の異常亢進で末期にみられた嘔吐・発汗・虚脱・死亡の経過自身が間脳乃至自律神経系の障害を疑はしめ、殊に虚脱状態の持続は末梢血管の機能障害を疑はしめ、Mc Gavack 等は動物実験上急性中毒死は心臓機能障害の型であり、又病理型態学的には PCP 中毒家兎は急性慢性に拘らず、脳・心臓・末梢血管に一定の所見を来すと述べている。又死亡時に立会つた二名の医師並に関係者について個別に聴取した意見を総合すれば、死亡時呼吸停止後数分で心搏停止し、死時体位は平静ならず、手を握りしめ強直も速かに現はれた如くであつたと云ふ。即ち Mc Gavack によつて家兎の急性中毒死後硬直の速かなことが指摘されており、野村氏もラッテ実験により同様の事実及び死時体位の異常を認めている。又主として神経系及び循環系を犯し、特に心臓及び末梢血管の障害により死亡したものと推定されると述べている。本例は死の様相は野村氏の報告と大体一致し、死時痙攣か死後強直かは判然としないとあるが、本例に於ては死時痙攣と同時に強直が認められた。

他覚的所見として重症中毒に於ては、白血球減少、軽度の貧血、血沈促進、血糖上昇、血圧下降血清 AG 比の低下、尿中ウロビリソンの出現、糖尿、尿インヂカン陽性等の所見が現はれたが、本例に於ては他覚的所見を欠いている。

又 PCP の皮膚作用は、野村氏の報告によれば、表皮及び毛嚢皮脂腺の如き外胚葉性組織に撰択的に慢性増殖性刺激を展開し、痙攣、面皰を形成するが、フェノール程でないにしても、酸性物質であり、接触条件によつては直接刺激性を示し、過敏症が成立すれば間葉性組織の病変をも来し、湿疹の如き症状となり得ると考へられると述べているが、本例は PCP-Na の塗布で、且つ急性の為に皮膚の変化は前述の如きフェノールによる火傷の様相を呈していた。

以上明らかに PCP-Na を上半身に塗布し、三日目に死の転機をとつた急性 PCP-Na 中毒死の一例と思はれるので報告した。

稿を終るに当中巨摩郡玉穂村の主治医乙黒源治博士の御助言に感謝の意を表します。

文 献 省 略

（本論文の要旨は第15回日本寄生虫学会東日本支部大会にて発表、尚本論文は東京医事新誌第73号第三巻に掲載。）

6. 宮入貝の薬劑に対する耐性について

大田 秀 浄、佐藤 重 房

日本住血吸虫の中間宿主宮入貝の殺貝に山梨県では従来石灰窒素が用いられていたが、昭和28年度より PCP-Na (Santobrite と同成分) が用いられる様になつた。これについて Mc Mullen は Santobrite, FN-1 が宮入貝に対して相等の殺貝効果があることを実験しているが現在、山梨県有病

地でこれらの薬剤によつてもなお殺貝されない宮入貝がある様である。これらの薬剤に対する先天性の低抗性について津田氏は室内実験により宮入貝は冬季には生物学的抵抗性が強度で、夏季には弱度であると述べている。しかし有病地に於ける春秋二期の数度の殺貝事業により宮入貝にも薬剤に対する獲得耐性が出来るのではないかと考え室内実験を試み、その結果を得たので報告する。

実験材料・実験方法・実験成績及び考按は省略。

結論 殺貝剤として用いられている Santobrite, DN-1 の水溶液を長期間に亙り、稀薄な薬液より逐次濃厚な薬液に作用せしめて、尚生存し得る宮入貝に吸収能耐性が出来る。

同一濃度の薬液を4週間（作用回数は1週間毎に4回）作用せしめて、尚生存し得る宮入貝にも吸収能耐性がみられる。

又、初めより濃厚な薬剤を作用せしめて、尚生存し得る宮入貝は、稀薄な薬液を作用せしめた場合よりも、より強い吸収能耐性を現わす。

尚組織耐性とみられるものはなかつた。

文献省略

（本論文の詳細は北関東医学雑誌第6巻第4号に掲載。）

7. Triostam (trivalent sodium antimony gluconate) による

日本住血吸虫症の治療について

大 田 秀 浄

日本住血吸虫症の治療に関しては現今、Stinbnal（三価酒石酸アンチモンソーダ）及び Fuadin, Stimon（三価アンチモン・ブレンツカテヒン・ジスルファオン酸ソーダ）が一般に使用されており、宮川、武藤、片田、五斗、Most et al. Alvin, J. B. Tillman. Billnigs, F. T. et al. Pesigan, T. P. et al. Harry most, 西村、岡部等の業績がある。その他本症の治療として吉田・森田の Antimon+(V)-Hexoat, 又最近西川は同剤の一種 Sodium oxyantimonic gluconate により実験を試みているが、各れも治療に長時日を要し、且つ副作用があり、農民を主とする日本住血吸虫症の治療に多くの障害を与えている。短期日に、且つ副作用のないことが本症の治療薬として望ましいのであるが、1944年 Goodwin, L. G. が Triostam (trivalent sodium antimony gluconate)

(30%trivalent antimonylを含む) (以下T. S. A. G. と省略) を 住血吸虫症に使用し、吐酒石の $\frac{1}{2}$ 、酒石酸アンチモンソーダより $\frac{1}{2}$ 毒性が少いことを発見し、その後M. Evfan, S. Talaat により埃及住血吸虫症の 38kg~64kg の成人36例に T. S. A. G. 6%溶液当量約 3mg を静注し、30例に6日間、6例に12日間使用し、前者は T. S. A. G. 全量 0.72~1.08g にて22例(73%)が虫卵陰転、副作用として注射直後遅脈が少数例にあり、嘔吐が2例(4回~5回注射后) 蕁麻疹様発疹が1例(3回注射后)に現はれ、短期日に、副作用少く治療に成功したことを報告している。又 Rodrigues da Salva and Dias が Manson 住血吸虫症に当量 15mg 48時間間隔で突撃療法を試み、好結果を得たと報告している。

今回、英国の Burroughs Wellcome 会社より本剤の提供を受け、動物及び人体の本症の治療を試